

## 東洋文庫所蔵河鍋曉斎筆《狂言始》に関して

安藤 万有子

### はじめに

東洋文庫に所蔵される《狂言始》は、「狂言始」と記された袋に一二枚の小判錦絵が入っている揃物であり、長唄や常磐津の浚番組、口上書などとともに『藝人ノ廣告繪』と題された帙に収められている。袋・絵ともに落款は無く、またそれぞれに題や詞書きなども無かったため、描かれている演目の特定を試みようとしたところ、その過程において河鍋曉斎による作品と判明した。

河鍋曉斎（一八三一—一八九九年）は幕末から明治期にかけて活躍した絵師であり、その傑出した画力や表現、様々な画派を貪欲に学び取り入れた姿勢などは、他の浮世絵師達と一線を画している。近年では特に戯画や妖怪画などに注目が集まっているが、自ら舞台に立つほどに能や狂言を嗜んでいたこともあって、それらを題材とした作品も数多く残している。

しかし、管見ながら、曉斎のこうした狂言を題材とする小判錦絵揃物で現在所蔵が確認できるものは多くはなく、

また東洋文庫に所蔵されるものを含めてそれぞれに袋や錦絵が一部異なっていることから、これらは制作された当  
本来の組み合わせではなく何種類か存在した同様のものが入り混じっている可能性が高いと考えられる。

本稿は、現在確認できる暁斎の揃物狂言画の概要を記し、他館所蔵のものと比較をするとともに、文庫所蔵資料を  
紹介するものである。

## 一 能画・狂言画

後発の舞台芸能である歌舞伎は江戸の大衆芸能であるがゆえに、絵画の主題・題材として多く取り上げられ、現存  
する作品も多く、そのため絵画資料を活用した研究も数多くなされてきた。しかし、能や狂言においてはそうした先  
行研究は歌舞伎ほど多くはないという。能や狂言は現代と比較してもその舞台装置や演じ方に大きな変化が無いこ  
もその理由の一つに挙げられようが、当時大衆からより身近な娯楽として人気を得ていた歌舞伎と比べると、江戸時  
代に武家の式楽であった能や狂言<sup>①</sup>に取材した作例の需要は高くはなかったものと推測される。

狂言や能に係わる作例については、いくつかに分類することができる<sup>②</sup>。このうち、本稿で紹介する暁斎の狂言画は、  
概して演者と特徴的な道具という最小限の要素のみで構成されており、上演されている場面そのものを描いた絵画に  
分類されると考えられる。



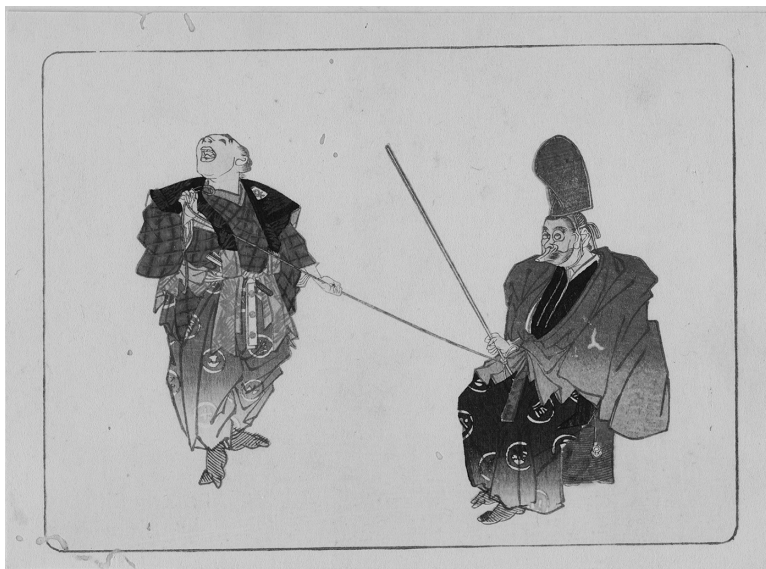
袋



1 鎌腹



2 梟山伏



3 瓜盗人



4 悪坊



5 釣狐



6 釣狐



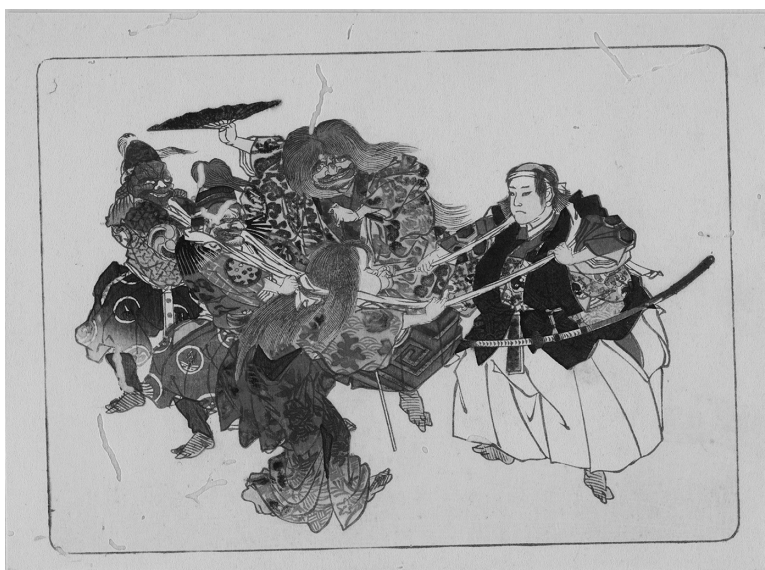
7 萩大名



8 蛸



9 木六駄



10 首引き



11 夷毘沙門



12 鬼の継子

個人蔵 ④《狂言づくし》	河鍋曉斎記念美術館蔵		東洋文庫蔵
	No.267-277 ③《狂言づくし》	No.257-266 ②《狂言づくし》	I-1-H-5-1.0 ①《狂言始》
尉面(B)	No.267 大黒面(C)	No.257 尉面(B)	(袋) 侍烏帽子(A)
			1 「鎌腹」
		No.264 「梟山伏」	2 「梟山伏」
			3 「瓜盗人」
	No.270 「悪坊」		4 「悪坊」
	No.272 「釣狐」		5 「釣狐」(揚幕)
		No.259 「釣狐」	6 「釣狐」
	No.271 「萩大名」		7 「萩大名」
		No.262 「蛸」	8 「蛸」
			9 「木六駄」
			10 「首引き」
		No.261 「夷毘沙門」	11 「夷毘沙門」
		No.260 「鬼の継子」	12 「鬼の継子」
(「三番叟」)		No.266 「三番叟」	
(「靱猿」)	No.269 「靱猿」		
(「末広がり」)	No.273 「末広がり」		
(「伯母が酒」)		No.258 「伯母が酒」	
(「節分」)		No.265 「節分」	
(「賽の目」)		No.263 「賽の目」	
(「腰折」)	No.276 「腰折」		
(「唐相撲」)	No.275 「唐相撲」		
(「大黒風流」)	No.274 「大黒風流」		
「井喰」			
(「浦島」)	No.268 「浦島」		
(「楽屋」)	No.277 「楽屋」		
12枚	10枚	9枚	12枚

ボストン美術館蔵	
11.45798.1-24 ⑥《狂言始》	11.45797.1-13 ⑤《狂言づくし》
11.45798.1 侍烏帽子(A)	11.45797.1 尉面(B)
11.45798.21 「鎌腹」	11.45797.4 「鎌腹」*
11.45798.24 「泉山伏」	11.45797.13 「泉山伏」*
11.45798.18 「瓜盗人」	11.45797.7 「瓜盗人」*
11.45798.19 「悪坊」	11.45797.6 「悪坊」*
11.45798.23 「釣狐」	11.45797.10 「釣狐」*
11.45798.20 「釣狐」	11.45797.5 「釣狐」*
11.45798.16 「人を馬カ」	11.45797.9 「人を馬カ」*
11.45798.2 「蛸」	11.45797.2 「蛸」*
11.45798.17 「木六駄」	11.45797.8 「木六駄」*
11.45798.15 「首引き」	11.45797.11 「首引き」*
11.45798.22 「夷毘沙門」	11.45797.3 「夷毘沙門」*
11.45798.14 「鬼の継子」	11.45797.12 「鬼の継子」*
11.45798.3 「三番叟」	
11.45798.4 「鞍猿」	
11.45798.5 「末広狩カ」	
11.45798.6 「伯母ヶ酒」	
11.45798.7 「節分」	
11.45798.8 「二九十八」	
11.45798.9 「腰折」	
11.45798.10 「唐人相撲(唐相撲)」	
11.45798.11 「大黒連歌カ」	
11.45798.12 「鼻取相撲」	
11.45798.13 「浦島」	
23枚	(*詞書き有) 12枚

・各セット(①～④)の題はそれぞれの袋の題箋に基づく。絵の題はそれぞれ各所蔵機関の表記に従った。

①東洋文庫所蔵(11.45798.1～11.45798.24)の題は同一のものであることを示すために、表中では(A)(B)(C)と付す。

②河鍋記念美術館所蔵『河鍋晩齋生誕160年記念 河鍋晩齋版画集(1)』中の「作品目録(1)一九九〇年版」より、No.267(横小14/狂言14)を266(横小23/狂言23)と付す。

③河鍋記念美術館所蔵『河鍋晩齋生誕160年記念 河鍋晩齋版画集(1)』中の「作品目録(1)一九九〇年版」より、No.267(横小14/狂言14)を266(横小23/狂言23)と付す。

④個人蔵 小池光雄「私の所蔵する榛原の晩齋デザイン作品(第二十六回河鍋晩齋研究発表会)」「(晩齋・河鍋晩齋研究誌)(103)所収、二〇一〇年」より。

⑤各絵の題の表記が無い場合、他の作例を参考にした上で丸括弧内に演目名を記す。ただし本文中に記述のある「井喰」については丸括弧を用いない。

⑥ボストン美術館コレクション <https://www.mfa.org/collections> (11.45798.1～11.45798.24)を⑤と付す。

⑦ボストン美術館コレクション <https://www.mfa.org/collections> (11.45798.1～11.45798.24)を⑤と付す。

⑧ボストン美術館コレクション <https://www.mfa.org/collections> (11.45798.1～11.45798.24)を⑤と付す。

⑨ボストン美術館コレクション <https://www.mfa.org/collections> (11.45798.1～11.45798.24)を⑤と付す。

⑩ボストン美術館コレクション <https://www.mfa.org/collections> (11.45798.1～11.45798.24)を⑤と付す。

⑪ボストン美術館コレクション <https://www.mfa.org/collections> (11.45798.1～11.45798.24)を⑤と付す。

⑫ボストン美術館コレクション <https://www.mfa.org/collections> (11.45798.1～11.45798.24)を⑤と付す。

⑬ボストン美術館コレクション <https://www.mfa.org/collections> (11.45798.1～11.45798.24)を⑤と付す。

⑭ボストン美術館コレクション <https://www.mfa.org/collections> (11.45798.1～11.45798.24)を⑤と付す。

⑮ボストン美術館コレクション <https://www.mfa.org/collections> (11.45798.1～11.45798.24)を⑤と付す。

⑯ボストン美術館コレクション <https://www.mfa.org/collections> (11.45798.1～11.45798.24)を⑤と付す。

⑰ボストン美術館コレクション <https://www.mfa.org/collections> (11.45798.1～11.45798.24)を⑤と付す。

⑱ボストン美術館コレクション <https://www.mfa.org/collections> (11.45798.1～11.45798.24)を⑤と付す。

⑲ボストン美術館コレクション <https://www.mfa.org/collections> (11.45798.1～11.45798.24)を⑤と付す。

⑳ボストン美術館コレクション <https://www.mfa.org/collections> (11.45798.1～11.45798.24)を⑤と付す。

## 二 暁斎による揃物狂言画の概要と比較

以下に東洋文庫所蔵の作品と、管見に入っただけのもののみであるが、同種の作例<sup>(3)</sup>と思われるものを列記する。

### (1) 東洋文庫

①東洋文庫所蔵《狂言始》 請求記号 I-I-H-5.1.0、錦絵それぞれは I-I-H-5.1.1～I-I-H-5.1.12 (図版)

袋は長辺を開じた筒状ではなく、三つ折りにし上下を折り曲げる畳紙の形態をしたものである。袋の表には舟形の侍烏帽子と扇が描かれ、その背景には菊花と壽の文字が見られる。裏面には「日本橋萬町 榛原直次郎板」とあり、榛原を版元とするものであったことがわかる。

中に収められている錦絵はすべて四つ切判の大きさで、「鎌腹」「梟山伏」「瓜盗人」「悪坊」「釣狐」(揚幕<sup>(4)</sup>)「釣狐」[萩大名]「蛸」[木六駄]「首引き」「夷毘沙門」「鬼の継子」の一二枚である。<sup>(5)</sup>

袋・錦絵ともに虫喰い箇所が多数見られるものの、すべてに裏打ちが施されている。

### (2) 国内

河鍋暁斎記念美術館では、袋入りの狂言画を二組有しているとい<sup>(6)</sup>う。

②河鍋曉斎記念美術館所蔵《狂言づくし》 No.257 (横小14／狂言14) ｝ 266 (横小23／狂言23)

袋には、「黒色皇太子作」と記された札が傍らに置かれた尉面、その奥に扇が描かれ、「狂斎」という落款から明治三年以前の出版としている。榛原聚玉堂製の版元印が捺されているとのことである。

内容は、「伯母が酒」「釣狐」「鬼の継子」「夷毘沙門」「蛸」「賽の目」「梟山伏」「節分」「三番叟」の九枚である。

③河鍋曉斎記念美術館所蔵《狂言づくし》 No.267 (横小24／狂言24) ｝ 277 (横小34／狂言34)

袋には大黒面と蔓桶が描かれており、右下に見える楕円形の印はおそらく曉斎の落款と思われる。版元については「江戸日本橋萬町榛原」の印が捺されているとのことである。

内容は「浦島」「靱猿」「悪坊」「萩大名」「釣狐」(揚幕)「末広かり」「大黒風流」「唐相撲」「腰折」「楽屋」の一〇枚で、「悪坊」「萩大名」の二枚には「狂斎画」、「楽屋」には「應需惺々狂斎圖」とある。

次のものは個人蔵であるが、『曉斎・河鍋曉斎研究誌』に掲載されており、図版は小さいものの袋を含め内容を認めることができるため、作例として挙げる。

④小池氏(河鍋曉斎記念美術館友の会会員)所蔵《狂言づくし》

②と同じ尉面が描かれた袋に一二枚の小判錦絵が入っており、その中身は掲載図版から「三番叟」「浦島」「靉猿」「伯母が酒」「唐相撲」「節分」「大黒風流」「賽の目」「腰折」「末広がり」「井喰」<sup>(8)</sup>「楽屋」と判別できる。<sup>(9)</sup>

### (3) 国外

ボストン美術館 (Museum of Fine Arts, Boston) には暁斎の狂言小判錦絵シリーズが二セット收藏されている。これらは明治十五年 (一八八二) から七年の間日本に滞在したアメリカ人医師ウィリアム・スタージス・ビゲロー William Sturgis Bigelow (一八五〇—一九二六年) が帰国後の一九一一年に寄贈したコレクション中に含まれているものであり、現在インターネット上で見ることができる。<sup>(10)</sup>

#### ⑤ボストン美術館所蔵《狂言づくし》 登録番号11.45797.1～13

袋は②と同じ尉面が描かれたものである。

こちらのセットに含まれる一二枚は、「蛸」「夷毘沙門」「鎌腹」「釣狐」「悪坊」「瓜盗人」「木六駄」「人を馬カ」「釣狐」(揚幕)「首引き」「鬼の継子」「梟山伏」である。錦絵すべてに詞書きがあり、枠外に「3444」と印字されている。また、「鎌腹」「悪坊」「人を馬カ」の三枚には「狂齋画」と落款がある。

#### ⑥ボストン美術館所蔵《狂言始》 登録番号11.45798.1～24

袋の絵は①と同じ侍烏帽子が描かれたものである。

こちらは「蛸」「三番叟」「靱猿」「末広狩カ」「伯母ケ酒」「節分」「二九十八」「腰祈」「唐人相撲(唐相撲)」「大黒連歌カ」「鼻取相撲」「浦島」「鬼の継子」「首引き」「人を馬カ」「木六駄」「瓜盗人」「悪坊」「釣狐」「鎌腹」「夷毘沙門」「釣狐(揚幕)」「梟山伏」の二三枚で、すべて詞書きや落款は無く、「*stage*」と枠外に捺されている。

なおボストン美術館では、⑤のセットが⑥のセットより先に、そして内輪で制作されたものであろうという見解を示している。

①③⑤⑥に含まれている「釣狐(揚幕)(図5)は、後シテの狐が揚幕から橋掛りへ出てくる場面を捉えたものであるが、「三番叟」と「楽屋」を除き他の絵では演者の姿及び演者が手にしているような最低限の道具以外は描かれていないのに対し、ここでは幕を引く後見の姿や本舞台に設置される罫、そしておそらく演出であろう煙も描かれている。この構図によく似たものが、現在河鍋曉斎記念美術館が所蔵している《能・狂言面之地取画卷》<sup>1)</sup>中に見られる。東洋文庫所蔵の①は、袋についてはボストン美術館が所有する二三枚組の⑥と同じものであり、その中身の組み合わせは同じくボストン美術館所蔵の一二枚組の⑤と一致している。しかし①の錦絵は、⑤の錦絵とは詞書きの有無が異なり、また、一部色彩は異なるが、絵の枠線の微妙な強弱などは⑥のものとはほぼ同一に思われる。

### 三 暁斎と狂言<sup>(12)</sup>

暁斎の狂言に纏わるエピソードは多く、最も早いものでは狩野派での修業時代であった十代の頃に大藏流狂言師の門に入り能狂言を学んだとする。恩人であった師の祖母の墓前で三番叟を踏んだというエピソードは、暁斎自身が挿絵を付けた『暁斎画談』や同時代人の飯島虚心（一八四一—一九〇一年）による『河鍋暁斎翁伝』にも記載されている。これ以外にも暁斎が狂言を演じた記録はいくつかあり、内輪の席で披露するのみならず本格的な舞台に立った記録も確認されている。さらに暁斎は狩野派修業時代のずっと後年、四十代半ばになってから再び狂言師の元に入門しており、明治八年（一八七五）には免状を授かっている。そのうえ、自宅に小さいながらも能舞台を持っていたという。

また、明治初期のごく一時、「吾妻能狂言」と呼ばれる能楽と歌舞伎を折衷させた芸能が興ったが、暁斎はこの新作狂言のための表紙絵や挿絵も複数手掛けている。この他、『能画図式』『猿楽図式』<sup>(14)</sup>といった多色刷版本や画帖も出版されており、また、今回扱ったような錦絵だけでなく、下絵や肉筆画（絵画）にも能・狂言を題材としたものが残っている。暁斎が写生や模写を多くしていたことは前述の《能・狂言面之地取画巻》<sup>(15)</sup>からも判断できるが、絵日記からは、能・狂言関係の人物達との交流や能・狂言に関する描写がいくつも確認できる。

暁斎が扱う画題の幅広さはよく知られているが、こうした様々な事柄は、能・狂言もまた暁斎にとって主要な題材

であったことの傍証と成り得るだろう。

## おわりに

能画・狂言画は先行の構図を踏襲したものが多く、本稿で紹介した作例をはじめとする暁斎の狂言画は、定型化した表現とは一線を画すような描き方が多いように思う。暁斎の精確な観察力と諧謔の精神に加え、鑑賞者としてだけでは得られない演者としての経験や理解が存分に反映されていることに、その根拠を求めることができるだろう。暁斎の能画・狂言画は先述の飯島虚心や能楽評論家の坂元雪鳥（一八七九—一九三八年）をはじめとする同時代の人々からも高い評価を得ていた。

東洋文庫に所蔵されている本作品は、先述の通り虫喰い箇所が多数見られるが、その点を除けば保存状態は比較的良好と判断できる。袋については多少の劣化は避けられないものの、その中に収められていた錦絵も含めそれぞれ変色なども少ないと見受けられることを報告しておきたい。

## 【参考文献（刊行年順）】

日本浮世絵協会原色浮世絵大百科事典編集委員会『原色浮世絵大百科事典』全一一巻、大修館書店、一九八〇—八二年。

飯島虚心『河鍋曉斎翁伝』ぺりかん社、一九八四年。

及川茂・山口静一「河鍋曉斎挿絵本の書目ならびに解題——上——挿絵とデザイン」『MUSEUM 東京国立博物館研究誌』(395)、一七—三〇頁、一九八四年。

河鍋楠美編『曉斎能画図式』河鍋曉斎記念美術館、一九八五年。

表章・天野文雄『岩波講座 能・狂言Ⅰ 能楽の歴史』岩波書店、一九八七年。

小山弘志・田口和夫・橋本朝生『岩波講座 能・狂言Ⅴ 狂言の世界』岩波書店、一九八七年。

山口静一「『能画図式』の謎——『猿楽図式』との関連——」『曉斎…河鍋曉斎研究誌』(34)、一四—二〇頁、河鍋曉斎記念美術館、一九八七年。

山口静一「河鍋曉斎とその挿絵(一)——曉斎の無名性について」『日本古書通信』第53巻第3号、三一—五頁、日本古書通信社、一九八八年。

山口静一「河鍋曉斎とその挿絵(二)——初期の挿絵と能狂言図」『日本古書通信』第53巻第4号、一五—一七頁、日本古書通信社、一九八八年。

小山弘志編『岩波講座 能・狂言Ⅶ 狂言鑑賞案内』岩波書店、一九九〇年。

河鍋楠美編『河鍋曉斎生誕160年記念 河鍋曉斎版画集(1)』河鍋曉斎記念美術館、一九九一年。

西野春雄「基調講演 河鍋曉斎と能・狂言」『曉斎…河鍋曉斎研究誌』(48)、八一—三頁、河鍋曉斎記念美術館、一九九二年。

西野春雄解説「能狂言之地取画卷」紹介『曉斎…河鍋曉斎研究誌』（48）、一四—二二頁、河鍋曉斎記念美術館、一九九二年。

吉田漱・西野春雄・藤城継夫「シンポジウム 鼎談」『曉斎…河鍋曉斎研究誌』（48）、二三—三〇頁、河鍋曉斎記念美術館、一九九二年。

森康尚「画家で狂言師——曉斎「狂言つくし」シリーズA・Bについて」『曉斎…河鍋曉斎研究誌』（48）、三二—三四頁、河鍋曉斎記念美術館、一九九二年。

「河鍋曉斎記念美術館所蔵 狂言の免状三通」『曉斎…河鍋曉斎研究誌』（48）、三五頁、河鍋曉斎記念美術館、一九九二年。

大野七三『河鍋曉斎——逸話と生涯』近代文藝社、一九九四年。

諏訪春雄・菅井幸雄編『講座 日本の演劇3 中世の演劇』勉誠社、一九九八年。

観世榮夫・羽生清・林久美子・安曇野徑著・京都造形芸術大学編『伝統演劇を学ぶ——日本の文化を今に伝える 能・狂言・歌舞伎・文楽の世界』角川書店、一九九九年。

藤岡道子「描かれた狂言——近世狂言絵画の諸例を見わたす——」『京都聖母女学院短期大学研究紀要』（30）、一—二〇頁、京都聖母女学院短期大学、二〇〇一年。

ジョサイア・コンドル著、山口静一訳『河鍋曉斎』岩波書店、二〇〇六年。

加美山史子「番付等から見る書画家の位置づけ——明治前半」『曉斎…河鍋曉斎研究誌』（95）、三八—四五頁、河鍋

暁斎記念美術館、二〇〇七年。

小林責監修・油谷光雄編『狂言ハンドブック 第3版』三省堂、二〇〇八年。

奥富利幸『近代国家と能楽堂』大学教育出版、二〇〇九年。

山口静一「資料紹介」(115) 六耀社『河鍋暁斎画集』二卷(平成六年刊) 暁斎の版本・挿絵『暁斎…河鍋暁斎研究誌』

(100)、一六—一八頁、河鍋暁斎記念美術館、二〇一〇年。

西野春雄「口絵解説 河鍋暁斎の能・狂言画」『暁斎…河鍋暁斎研究誌』(103)、二—五頁、河鍋暁斎記念美術館、二〇

一〇年。

小池光雄「私の所蔵する榛原の暁斎デザイン作品(第二十六回河鍋暁斎研究発表会)」『暁斎…河鍋暁斎研究誌』(103)、

八—一二頁、河鍋暁斎記念美術館、二〇一〇年。

藤田昇「私の持っている暁斎(72) 暁斎筆狂言画三作品——「福之神」「蟹山伏」「伯母ヶ酒」——」『暁斎…河鍋暁斎研

究誌』(106)、四四—四六頁、河鍋暁斎記念美術館、二〇一一年。

橋本朝生『続 狂言の形成と展開』瑞木書房、二〇一二年。

宮本圭造「能・狂言と絵画——描かれた能・狂言の系譜——」『能楽研究』(37)、四九—一一〇頁、法政大学能楽研究所、

二〇一二年。

阿部理代『「暁斎絵日記」に見る暁斎と能・狂言画(第三二回河鍋暁斎研究発表会)』『暁斎…河鍋暁斎研究誌』(110)、

一一—一六頁、河鍋暁斎記念美術館、二〇一三年。

加美山史子「暁斎と能狂言…上演した狂言を中心に（第三二回河鍋暁斎研究発表会）」『暁斎…河鍋暁斎研究誌』（110）、一七—二二頁、河鍋暁斎記念美術館、二〇一三年。

藤田昇「私の持っている暁斎（79） 暁斎筆団扇絵「狂言 腰折」（肉筆）」『暁斎…河鍋暁斎研究誌』（110）、三八頁、河鍋暁斎記念美術館、二〇一三年。

河鍋暁斎記念美術館編『河鍋暁斎絵日記——江戸っ子絵師の活写生活』平凡社、二〇一三年。

『河鍋暁斎の能・狂言画』展覧会図録、三井記念美術館、金沢能楽美術館、二〇一三年。

ボストン美術館ホームページ <https://www.mfa.org/collections>（二〇一九年一月一五日最終閲覧。）

## 註

（1） 狂言は能と共に存続してきた芸能であり厳密な区別を以て論じることが難しいため、ここでは併せて述べる。散楽、猿楽及び田楽に起源を有する能・狂言は、観阿弥・世阿弥が足利義満による庇護を得て以来武家階級の愛好するところとなり、有力者達の後援を受けるようになった。豊臣秀吉が制度として能の保護を行うと続く徳川家康もそれを踏襲し、能は武家の式楽としての地位を確立し役者達は幕府や諸藩に召し抱えられるようになる。そうしていれば武家の専有物となった能を一般大衆が鑑賞する機会は、町入能や勧進能などに限られていった。しかし完全に大衆から縁遠いものとなってしまうわけではなく、庶民にも広く好まれていた謡や仕舞からその母胎である能・狂言に興味を抱く者や、教養としての芸事というかたちで嗜む町人階級も多く存在した。

（2） 西野氏は鑑賞や記録を目的として描かれた作品と条件付けた上で、能画・狂言画を「風俗画の画中舞台として描いたもの」

- 「能舞台での上演を中心に象徴的な場面を描いたもの」「能・狂言を画材に能舞台を放たれた物語絵」の三つに大別している。(西野春雄「河鍋曉斎の能画・狂言画」『河鍋曉斎の能・狂言画』展覧会図録所収、二〇一三年)。宮本氏は芸や興行、演者自体を伝達するための、鑑賞を目的としないものも含め、「芸を伝えるための絵画」「役者の面影を記憶する絵画」「風景の一つとして演能を描く絵画」「能・狂言の舞台を描く絵画」「能の興行を記録する絵画」「能の物語を描く絵画」の六種に分類している。(宮本圭造「能・狂言と絵画―描かれた能・狂言の系譜―」『能楽研究』(37)所収、二〇一二年)。

- (3) 題の表記はそれぞれ各所蔵機関に従ったものである。
- (4) 「釣狐」を題材とする絵は二種あり、一つは狐が本来の姿で揚幕から登場する場面、もう一つは伯藏主に化けた狐がおそらく狐師の家から帰っていく場面である。本稿では便宜上前者の絵に(揚幕)と付す。

- (5) いずれも詞書きなどは無く、演目の同定には『河鍋曉斎生誕160年記念 河鍋曉斎版画集(1)』、『河鍋曉斎の能・狂言画』展覧会図録、『岩波講座 能・狂言Ⅶ 狂言鑑賞案内』、『狂言ハンドブック 第3版』及び、文化デジタルライブラリー(独立行政法人日本芸術文化振興会による) <http://www2.nijiac.go.jp/dglib/> などを参考にした。

- (6) 河鍋曉斎記念美術館所蔵の二組(②・③)については、主に前掲書(『河鍋曉斎生誕160年記念 河鍋曉斎版画集(1)』及び『河鍋曉斎の能・狂言画』展覧会図録)、森康尚「画家で狂言師―曉斎「狂言つくし」シリーズA・Bについて」(『曉斎・河鍋曉斎研究誌』(48)所収、一九九二年)により確認できる情報に基づいて記す。また、前掲展覧会図録によると河鍋曉斎記念美術館は他に〈狂言はじめ〉という一二枚の袋入り小判錦絵も一組所蔵しているようであるが、こちらは少々性格の違うものと見受けられるので本稿では取り上げないこととする。

- (7) 小池光雄「私の所蔵する榛原の曉斎デザイン作品(第二十六回河鍋曉斎研究発表会)」『曉斎・河鍋曉斎研究誌』(103)、八一―一二頁、河鍋曉斎記念美術館、二〇一〇年。

- (8) 前掲論文中の言及から同定。

- (9) 演目の同定については註(5)と同様。
- (10) <https://www.mfa.org/collections> (二〇一九年一月一五日最終閲覧。) なお、「人を馬」と推定している二点は、二〇一八年一月閲覧時点では作品の同定がされていなかった。
- (11) 弟子でもあった豪商鹿嶋清兵衛の求めに応じて能や狂言に関する画稿を貼り合わせた画卷。面だけではなく、装束や舞台装置、演じている場面などの写生も含まれている。
- (12) 暁斎と能・狂言に関しては、二〇一三年の『河鍋暁斎の能・狂言画』展覧会図録に詳しい。また、『暁斎…河鍋暁斎研究誌』においては(48)(一九九二年)及び(110)(二〇一三年)に特集されている。
- (13) 狩野派時代の師である洞伯陳信の祖母も能狂言を愛好しており、当時の暁斎はその縁で支援を受け狂言を学び続けることができたという。
- (14) どちらも能画よりも狂言画を多く掲載している。
- (15) 散逸しており、発見されているものが『暁斎絵日記』として河鍋暁斎記念美術館から現在四巻まで発行されている。『暁斎絵日記』(一)～(四)、一九八五―二〇一〇年。『暁斎絵日記』における能・狂言については特に『暁斎…河鍋暁斎研究誌』(110)(二〇一三年)に詳しい。

(慶應義塾大学大学院文学研究科美学美術史学専攻修士課程修了)